

2022年 新春対談

安川電機・小笠原 浩 社長 × 日刊工業新聞社・井水 治博 社長

世界の共通言語はデータ

安川DXはデジタル経営の基盤

2022年が明けた。新型コロナウイルス感染症はまだ収束せず、産業界への影響は人流の停滞だけでなく、物流の逼迫や半導体の供給不足など甚大だ。一方でニューノーマル(新常态)により社会のデジタル化は急速に進んだ。産業界にもデジタル変革(DX)の波が押し寄せており、もはやあらがうことができない。

はできない。産業用ロボット大手の安川電機はいち早くDXに取り組み、21年には「安川テクノロジーズセンター(YTC)」が稼働した。そのYTCを日刊工業新聞社社長の井水治博が訪れ、DXの展望や22年の景気動向などを小笠原浩社長と話し合った。

安川電機 小笠原 浩 社長



井水 DXに對しても積極的の発信されています。小笠原 世界の共通言語はデータです。データ化と統合化で利益を確実に上げることがデジタル経営の本質と考へます。従業員に對しては働きやすい会社ではなく、やりがいのある会社を目指そうと働きをデジタルで評価するようになっています。

井水 新年あけましておめでとございます。22年もよろしくお願ひいたします。本日は21年9月に本格稼働したYTCを拝見しようと参りましたが、大変素晴らしい施設ですね。

小笠原 17年にソリユシオンコンセプト「アイキューブメカトロニクス」を提唱しましたが、その時に開発部門を集め、知恵を出し合うことでイノベーションを生む流れをつくらうと考へたのがきっかけです。事業部ごとに分かれていた営業部門を統合し、次に自社製のロボット、サーボモーター、インバーター、そしてIoT(モノのインターネット)を使って自動化した次世代の基幹工場「安川ソリユシオンファクトリ」(埼玉県入間市)を開発しました。技術部門を統合したYTCは総仕上げであり、感慨深いです。

井水 1フロア8000平方メートルにエンジニアが並び光景は圧巻です。小笠原 当社はシステムエンジニアリングから始まり、サーボ、インバーター、ロボットと製品領域を広げました。一方で開発場所はそれぞれがバラバラで、目標も時間軸も統一されていませんでした。そこで私が技術本部長時代、当時の津田純嗣社長(現会長)の命を受け開発部門の集約に着手したのです。井水 技術者のコミュニケーション

井水 17年にソリユシオンコンセプト「アイキューブメカトロニクス」を提唱しましたが、その時に開発部門を集め、知恵を出し合うことでイノベーションを生む流れをつくらうと考へたのがきっかけです。事業部ごとに分かれていた営業部門を統合し、次に自社製のロボット、サーボモーター、インバーター、そしてIoT(モノのインターネット)を使って自動化した次世代の基幹工場「安川ソリユシオンファクトリ」(埼玉県入間市)を開発しました。技術部門を統合したYTCは総仕上げであり、感慨深いです。

小笠原 アイキューブメカトロニクスはインテグレートド(統合的)、インテリジェント(知能的)、インベスティグ(革新的)の3つの頭文字を取ったソリユシオンコンセプトです。私がモーションコントロール事業部時代に発案したもので、簡単に言うと個別最適から全体最適に組織や仕事の順番を統合し、実現していく考えです。当社のモノづくりの考え方は生産ライン全体の制御は行わず、請け負うのはセルまでと割り切っています。ただしセルの中の稼働データはしっかりと集

小笠原 アイキューブメカトロニクスはインテグレートド(統合的)、インテリジェント(知能的)、インベスティグ(革新的)の3つの頭文字を取ったソリユシオンコンセプトです。私がモーションコントロール事業部時代に発案したもので、簡単に言うと個別最適から全体最適に組織や仕事の順番を統合し、実現していく考えです。当社のモノづくりの考え方は生産ライン全体の制御は行わず、請け負うのはセルまでと割り切っています。ただしセルの中の稼働データはしっかりと集



日刊工業新聞社 井水 治博 社長

アイキューブメカトロニクスで課題解決



1フロア8000平方メートルにエンジニアが並び光景は圧巻



テクノロジーセンターへの入り口では創業時からの歩みを振り返ることができる

小笠原 海外の企業を成長させている競争相手は中国です。中国の先行きを見て見ますか。井水 中国でも欧州でもどこにいてもこの取り組みを進めなければ生き残ることはできません。まだしばらくは中国が世界の生産地であり続けるでしょうし、その動きにきちんと対応していくことが大切です。井水 自動車や通信などあらゆる産業が変革期を迎えています。工作機械業界も今後10年間で日本がどう変わるかと危機感を持っています。小笠原 確かに10年後の危機は感じますが、だからといって

機械の性能を上げ、市場で勝てるお手伝いをすることによって、お客さまの利益が向上しその利益を分けていただく。そういった関係が構築できれば取引先も関係が構築でき、このビジネスモデルは日本と中国で徹底的に進めたい。お客さまの懐に飛び込み、最高の機械をつくるお手伝いをすることで、互いの成長につながります。小笠原 中国でも欧州でもどこにいてもこの取り組みを進めなければ生き残ることはできません。まだしばらくは中国が世界の生産地であり続けるでしょうし、その動きにきちんと対応していくことが大切です。井水 自動車や通信などあらゆる産業が変革期を迎えています。工作機械業界も今後10年間で日本がどう変わるかと危機感を持っています。小笠原 確かに10年後の危機は感じますが、だからといって

人とロボットが共存した新たなモノづくりの実現

人と同じ空間で協働して作業を行える「人協働ロボット」

原動力は北九州。動かすのは世界。

社会の持続的発展に向けたメカトロニクス技術の応用

省エネ・環境負荷の低減 植物工場の自動化・省略化 再生可能エネルギーの普及 医療・福祉分野への貢献